

アメリカにおけるイラン研究の現状

I

イランは長い歴史を誇り、その文化は世界史の中で大きな役割を果たしてきた。経済史の分野でも、一般に現代の銀行制度は中世イタリアにその淵源が求められているが、正しくはイスラーム帝国治下のペルシアで発達したものに求められねばならないし、手形の使用、株式会社制度なども中世におけるペルシアの経済的繁栄の中で生まれたものである。しかしながら、イラン研究はこれらペルシアの果たした歴史的役割を正しく評価させるまでに、また現代イランを正しく把握させるまでには進んでいない。最近ではソ連邦の学者により社会経済史も含め広範にイラン研究が進められ、数多くのすぐれた業績があげられているが、欧米では必ずしもすすんでいるとはいえない。R. Levy, A. K. S. Lambton, A. J. Arberry, P. Avery などイギリスの学者が欧米におけるイラン学で中心的地位を占めているが、A. K. S. Lambton を除きこれらの学者は、中世ペルシア文学の専門家である。

華麗を誇ったペルシア文学の研究が欧米におけるイラン学の主流であり、また今日でもこの伝統は保持されている。イランに関する専門書のうち、これら文学関係書の占める割合の多さは、この事を傍証しているといえよう。

合衆国におけるイラン学研究の歴史はヨーロッパの先進国におけるよりも新しい。一部の大学、たとえばプリンストン大学では、早くも1927年に東洋言語・文学科 (Dept. of Oriental Languages and Literatures) が創設されイラン研究がこの中で進められたほか、ハーバード、シカゴなどいわゆる“一流”の私立大学でもイラン研究が行なわれていた。しかし、今日のように多くの大学でペルシア語を教え、イラン関係の講座をもつようになったのは第2次世界大戦後のことである。連邦政府は非西欧諸地域の研究を進める必要を感じ、National Defense Education Act を成立させた。これによって政府は、特定の大学に助成金を出した。すでに西アジア研究を行っていた大学では、研究組織を整備、充実、また従来西

アメリカ合衆国のイラン研究機関

大 学 名	学科もしくはセンター名 (chairman もしくは director)
Princeton Univ.	Program in Near Eastern Studies (Morroe Berger) Dept. of Oriental Studies (T. C. Young)
Columbia Univ.	The Middle East Institute (John S. Badeau)
Harvard Univ.	The Center for Middle Eastern Studies (H. A. R. Gibb) Dept. of Near Eastern Languages and Literatures
Univ. of Chicago	The Center for Middle Eastern Studies (William R. Polk) Dept. of Oriental Languages and Civilizations (Raymond A. Bowman) The Oriental Institute
Univ. of California, Los Angeles	Near Eastern Center (G. E. von Grunebaum) Dept. of Near Eastern and African Languages (Andreas Tietze) Dept. of Islamic Studies.
Univ. of California, Berkeley	Dept. of Near Eastern Languages (William N. Brinner)
Univ. of Michigan	The Center for Near Eastern and North African Studies (William D. Schorger) Dept. of Near Eastern Languages and Literatures (Geogre G. Cameron)
Univ. of Pennsylvania	Dept. of Oriental Studies: The Near East Division and Indo-Iranian Division
Indiana Univ.	Dept. of Near Eastern Languages and Literatures (W. Jwaideh)
Univ. of Utah	The Middle East Center (Aziz S. Atiya)
Univ. of Texas	The Middle East Center (Robert A. Fernea)
Portland State College	The Middle East Studies Center (Fredrick J. Cox)

アジア研究でなんの実績もなかった大学では、新たに学科や研究所、研究センターを設けるなどして、西アジア学の講義・研究が進められるようになった。現在合衆国でイラン関係の組織的教育が行なわれているのは、私立ではプリンストン、コロンビア、ハーバード、シカゴの4校と、州立ではカリフォルニア・ロスアンゼルス、カリフォルニア・パークレイ、ミシガン、ペンシルバニア、インディアナ、ユタ、テキサス、ポートランド・ステートの8校の12の大学におよんでいる。

II

合衆国でもヨーロッパ同様、人文科学がイラン研究の中心になっている。なかでも、現代ペルシア語は例外なく12のすべての大学で教えられ、イラン学講座の中核になっている。日本の大学では、特殊語は講義時間が少ないのが普通だが、合衆国では集中的に行なわれるのが常である。わたくしが留学したインディアナ大学では上級は週3回、3時間の講義のみであるが、初・中級とも講義は週5回のディリー・コース（毎回1時間）で、このほかにランゲジ・ラボラトリで週2回、3時間、それにこれは事情によって行なわれなかったが週3時間のドリルが行なわれることになっている。大学によって講義時間数に若干の差異はあるが、インテンシブ方式を採用し、効果的な教育効果をあげていることには変わりはない。教科書にはミシガン大学で出版されている P. Avery, M. A. Jazaeli, H. Paper 3 教授の編纂した *Persian Reader* (Ann Arbor, 1962) 3vols がインディアナ大学では使われており、他の大学でもこれがよく使用されているようである。講義方法は文法の基礎より教えるというのではなく、初めから直接文章を読み、その中で文法的な説明をし、ヒアリングの力もつけるという方法をとっている。また、ペルシア語以外の外国語でも同じであるが、必ず大学院の学生で成績の優秀な native speaker を助手 (teaching associate. または teaching assistant) として雇っている。インディアナではアメリカ文学専攻の Ph. D. コースのイラン人学生が teaching associate として正規の講義のうち4時間とラボラトリを担当していた。

各大学の現代ペルシア語担当教官は、Martin Dickson 助教授 (プリンストン)、Manucheher Mohandes 氏 (ハーバード)、Heshmat Moayyad 助教授 (シカゴ)、Amin Banani 准教授 (カリフォルニア・ロスアンゼルス)、Rodney F. Algar 助教授 (カリフォルニア・パークレイ)、Mark J. Dresden 教授 (ペンシルバニア)、

G. L. Tikku 准教授 (インディアナ)、Mohammad Ali Jazaeli 教授 (テキサス) で、コロンビア、ミシガン、ユタ、ポートランド・ステートの担当教官は手元の資料より明らかでないが、いずれも3学年制の講座が設けられている。

現代ペルシア語についてペルシア文学の講義もほとんどの大学で行なわれている。たとえば、プリンストンでは T. C. Young 教授が「西アジアの文学：イラン」、ハーバードでは Richard N. Frye 教授が「イランの言語と文学：フェルドゥシーまで」と M. Mohandes 氏が「イランの言語と文学：フェルドゥシーから現代まで」、シカゴでは H. Moayyad 助教授が「古典文学」を講義している。またカリフォルニア・ロスアンゼルスでは A. Banani 准教授の「ペルシア文学研究」、「ペルシア文学ゼミ」、パークレイでは R. F. Algar 助教授の「ペルシア文学史」、インディアナでは G. L. Tikku 准教授の「ペルシア文学研究」、ユタでは「西アジアの文学：ペルシア」などがある。

ペルシア文学はいうまでもなく中世文学が中心で、上にあげた講義もほとんどが、10～14世紀の文学を中心にした講義である。しかし、一部の大学では近代文学がとくに取り上げられている。たとえばシカゴ大学はその一例で、上にあげた「古典文学」のほか、同じく H. Moayyad 助教授が「現代ペルシアの散文：ヘダーヤトの *Bāf-e Kār*」、「現代ペルシアの韻文」、「現代ペルシアの文学：短篇小説」を講義している（3カ月を単位とした quarter ずつ）。また、インディアナでも前期は近代以前、後期には近代文学の講義が行なわれた。10～14世紀の文学の場合、主要文学作品の多くは欧米語に翻訳されており、研究書も研究論文も多く出ている。しかし、近代文学作品はごくわずかしか翻訳されておらず、これも一つの原因となって近代文学の研究、紹介はおくれていた。しかし、最近著名作家の作品の翻訳計画も進んでいるほか、テヘラン大学講師の H. Kamshad 氏による *Modern Persian Prose Literature* が1966年に出版された。今後この分野での研究は、欧米でも進展するものと思われる。

近代文学者の中で欧米でもっとも注目され研究されているのは、1951年にパリで自殺したサーディク・ヘダーヤトである。とくにヘダーヤトの傑作といわれる *Bāf-e Kār* (めくらのふくろう) は間接的に実存主義、仏教の影響を受けた作品で、1930年代のフランスの実存主義、またフランス哲学界をとおして当時のヨーロッパの文学界

にも多大の影響を与えた。そしてこの *Bāfe Kār* の研究を通じて、欧米ではヘダーヤト研究が進められ、いくたの研究論文が出されている。またこのほか、言文一致を唱え、ペルシア近代文学の父といわれているアリー・ジャマルザーデや、第2次大戦後における最大の作家と目されているチューバク、ジャマルザーデとともに近代文学確立に大きな役割を果たした、ボゾルグ・アラヴィーなどが研究の対象になっている。ボゾルグ・アラヴィーは社会主義作家で、レザー・シャー圧制中は投獄され、大戦後は東ドイツに亡命、現在フンボルト大学でペルシア語を教えている。かれの作品の中には政治因としての記録や農民の悲哀をつづったものが多く、それらは第2次大戦前の社会状態を知るための一つの手懸りを与えてくれる。また近代ペルシア文学の一つの特徴として、社会小説があげられる。近代化の波によって生じた社会のひずみ、伝統に固執する階層と新しい要素を導入しようとするものの相克などをテーマにしたものが、ジャマルザーデ、ヘダーヤトをはじめ多くの作家の作品の中に見いだされる。これら社会小説の研究はイランの社会の理解に多くのものを与えてくれるであろう。この点で、ペルシア近代社会小説の本格的な研究が進められることを期待したい。

ペルシア文学について、イスラーム以前の言語、文化の研究も盛んである。これはカリフォルニア・パークレイ、ハーバード、ペンシルバニアなど、イラン研究で歴史を誇る大学で行なわれている。たとえば、ハーバードではアメリカにおけるイラン学の権威者の1人 Richard N. Frye 教授が「古代イランの文化」、「古代ペルシア語」、「アヴェスタ」、「中世ペルシア語」、パークレイでは Walter B. Henning 教授が「古代イランの宗教」、「中世ペルシア語」、「古代ペルシア語」、「イラン言語学」、「古代イランの文明」、コロンビアでは Yar-Shater 教授が「古典ペルシア語」、Conrad M. Arensberg 教授が「古代世界の人人：イランからインドまで」、ミシガンでは Herbert H. Paper 教授と Gernet L. Windfuhr 助教授が「古典ペルシア語講読」、「古代ペルシア語」、「アヴェスタ」などの講義を行なっている。さらに、イスラーム以前の研究に重点をおいているペンシルバニアでは、M. J. Dresden 教授が「古代ペルシア語とアヴェスタ」、「中世ペルシア語入門」、「イラン研究ゼミ」。また、プリンストンでは T. C. Young 教授と M. Dickson 助教授が「古典ペルシア語講読」、カリフォルニア・ロスアンゼルスでは A. Banani 准教授が「古典ペルシア語講読」を担当している。

そのほか、言語学関係では「ソグド語」、「クルド語」、「パシュトゥ語」、「イラン語比較言語学ならびにその歴史」がハーバードで (R. N. Frye 教授担当)、「イランの言語の比較研究」、「イラン言語学」がパークレイ (W. B. Henning 教授)、「クルド語」がミシガンで講義されている。このように合衆国では W. B. Henning, R. N. Frye, M. J. Dresden, H. Paper, Yar-Shater などこの国のイラン学を代表する学者が、イスラーム以前のイランの専門家であるため、この分野では充実している。合衆国におけるイラン学はこの分野にこそ特徴があるといっても過言ではなからう。

言語学、文学に比べ、いちじるしくおこなれているのは歴史学研究である。一応ほとんどの大学では「西アジア史」の講座がもたれ、この中でイラン史も触れられているが、前・後期で長い歴史をもつ西アジア史が概説されているにすぎない。イラン史の独立した講義は、プリンストンの「サファヴィー朝史の諸問題」(M. Dickson 助教授)、ハーバードの「イラン近代史」、(イエール大の Firuz Kazemzadeh 客員教授)、ロスアンゼルススの「イスラミック・イラン」(N. Keddie 准教授)、ミシガンの「中世におけるイラン文明の研究」、インディアナの「ペルシア近世史」(B. G. Martin 准教授)、ユタの「イラン史一紀元前6世紀から20世紀まで」のみである。合衆国のイラン史学会は、以上のように充実しているとはいえないが、この中では、ロスアンゼルススの准教授 Nikki Keddie 女史とイエールの F. Kazemzadeh 准教授が最も活躍し、業績をあげている歴史家である。

他の社会科学の分野では、ペンシルバニアで Herbert M. Berk 講師が「イラン国際関係論」を講義しているのみで、ほかはすべて中東全般にわたる講義の中でイランが補足的に扱われている程度である。アラブ圏の研究で業績をもつ学者はかなりいるが、イランの社会科学的な研究ではシカゴ大学政治学科主任教授 Leonard Binder のほか数えるほどしかいないのが現状である(同氏は「中東の国際関係論」、「中東の比較政治論」のほかいくつかのゼミを担当している)。

以上述べたように、アメリカでは言語、文学の研究が現在でもイラン学の主脈をなし、歴史学や経済学、社会学など社会科学は未発達段階にあるといっている。

一方、イラン研究では、大学別にきわだった特徴が認められる。つまり、T. C. Young 教授のいるプリンストン、Yar-Shater 教授のいるコロンビア、R. N. Frye 教授のいるハーバード、W. B. Henning 教授のいるパー

クレイ, H. Paper 教授のいるミシガン, M. J. Dresden 教授のいるペンシルバニアなどは、イスラーム以前のイラン研究に、また、Nikki Keddie, Amin Banani 准教授のいるロスアンゼルスは近代史研究に特色がみられる。一方、他の大学ではとくに目立った特徴はなく、現代ペルシア語の講義を中核とし、それにイラン関係の関連講義を行なっているのみである。

III

日本同様、合衆国でもアラブ研究と比べた場合、イラン研究の劣勢は否めない。ハーバード大学中東研究センターは1965年までに73名のリサーチ・アソシエイトやリサーチ・フェローを任命したが、このうちイラン研究者はカリフォルニア大准教授 Amin Banani 氏（研究課題: The Formation of Iranian Nationalism in the Writings of the Intelligentsia), Khodadad Farmanfarmaian 氏 (Structure and Development of the Iranian Economy), イエール大准教授 Firuz Kazemzadeh 氏 (Anglo-Russian Rivalries in Iran, 1860-1914), Mac W. Thornburg 氏 (Non-Economic Factors in the Development of Middle Eastern Societies: Iran), Joseph M. Upton 氏 (An Evaluation of the Modifications within Iranian Society: Resulting from the Current Pressures for Modernization and Westernization) のわずか5人で、さらに同センターの研究シリーズ(1965年現在11冊)、モノグラフ(13冊)の中に、イラン関係は上記 J. M. Upton 氏の *The History of Modern Iran: An Interpretation* (1960) が見いだされるにすぎないことからこの点は明瞭になろう。つぎにイラン学専攻学生数、Ph. D. 論文数などでもアラブ学のそれと比べ、いちじるしく少ないのがみられる。他の大学の事情はわからないがインディアナ大学ではアラブ語、ヘブライ語のクラスには多くの学生(10~30人ぐらい)が受講していたが、ペルシア語のほうはきわめて少なく、初級2名、中級3名、上級1名、また「ペルシア文学研究」は前期3名、後期2名といった状態であった。他のいわゆる“一流”大学では受講者はこれよりは多いと思われるが、それとてイラン学専攻者よりも Ph. D. をとるためのマイナー・コースとしてペルシア関係の講義をとっているものが多いようである。また、毎年出版されている *Dissertation Abstracts* をみても、イラン人留学生を除きイラン学で Ph. D. 論文を書く学生は数えるほどしかない。以上述べたように、アメリカにおけるイラン学は他の西アジア

学と比べても非常におくれており、また、イラン学の中でも伝統的な言語、文学が中心であると結論してよい。そして合衆国の研究水準はまだイギリスやソビエトのそれに追いついていないとしてよいであろう。

IV

最後に合衆国の大学で気のついた点を一、二あげておきたい。その第一は研究者、学生が経済的に安心して研究を進めることができるような環境におかれていることである。National Defence Education Act (NDEA) によって地域研究を行なうための機関が連邦政府の補助を受け、研究環境を整備したことは述べたが、政府は研究者育成のため大学院の学生に対して NDEA. Title IV によって、年3000ドルほど(このほかに授業料、扶養手当)の fellowship を成績優秀な学生に与えている。このほか Asian Foundation や他の財団の fellowship、大学独自の fellowship などもあり、真面目に勉強している学生はアルバイトの必要もなく学生生活を送れるようになっている。

また、外国研究を行なっているもので、研究のため外国に赴く必要のあるものは比較的容易に海外に学ぶことができるようになっている。NDEA やフルブライトなどの奨学金はこの種の目的のためには容易にとれ、イラン史で Ph. D. 論文を書く学生が少なくとも一夏をロンドンやニューデリーのアーカイブやテヘランで過ごすことは普通のこととなっている。これらはアメリカの豊かな経済力に負うものであるとはいえ、生活のためアルバイトを強いられ、また必要上海外に出る場合私費をも投ぜねばならぬ日本の研究者にとっては、まさに垂涎のことといえよう。

整備された図書館もわれわれにとっては羨しいことであつた。インディアナ大学のように西アジア研究で歴史をもたぬ大学ですら多くの西アジア関係図書を所蔵している。たとえば、19~20世紀に出版された欧米語で書かれたイラン関係の図書で重要なものはほとんど揃っていた。また、所蔵冊数が多いということのほか、図書館は利用しやすいように運営されている。日本の大学では図書は中央図書館のほか、各学部、学科、研究室に分散し、利用に少なからず不便をきたしている。しかし合衆国では原則として図書は中央図書館に集められ、分散による図書利用の不便といったことはない。また、利用度の高い本は Graduate Reserve Room と Undergraduate Reserve Room とにおかれ、借出しは禁止されている。

日本では学科、学部図書館を除き、中央図書館の書庫内への出入りはできないのが普通だが、合衆国では原則として open stack system をとっており、学生（大学院の学生だけのところもある）は身分証明書を提示するだけで自由に書庫内にはいることができる。また、カード・カタログもきわめてよく整理され、リファレンス・サービスも十二分にゆきとどいている。つぎにわたくしがもっとも羨しく感じたのは全米の図書館間で行なわれている Inter-Library Loan System である。つまり、自分の所属する大学の図書館にない書籍は、利用者が研究用に使う場合に限り、所属大学の図書館を通して他の大学より借用することができる。利用者は所定のフォームに必要事項を記入し、指導教官のサインをもらえば、10日ほど待つだけで必要な書籍を2週間の間利用することができる。また、雑誌論文の場合には、ゼロックス・コピーが送られてきて、利用者は無料でそれをうることができるのである。このため、国内の大学に籍をおいている限り、どの大学にいても国内にある資料に接することができ、日本におけるように地方から図書閲覧のため上京したりする必要など、まったくないのである。このような制度はヨーロッパでも行なわれていると聞くが、潤沢な図書購入費のない日本のような国でこそ積極的に実施さるべきことではなかろうか。

日本では、大学図書館でもまた他の研究機関の図書館でも、ごく一部の例を除き、関連学科専門のライブラリアンはいないのが普通である。しかし、合衆国では各学科が専門のライブラリアンをもち、かれらによって図書の購入、カード整理などの業務が迅速に行なわれてい

る。たとえば、インディアナ大学の中東言語文学科にはヘブライ、アラブ、ペルシア語に堪能な、しかも、資料事情に詳しい専門のライブラリアンが何人かおり、かれらが教官より出された選書カードの処理、何種類にもよる現地語の雑誌、新聞の整理をはじめ、資料整理・収集業務を行なっている。このほか、図書館内のリファレンス・サービスも実によくゆきとどいている。Library of Congress のカタログ、Ph. D. 論文の *Dissertation Abstracts*, *Readers' Guide to Periodical Literature*, *Book Review Digest* などが全米的な規模で出されているが、これなど利用者にとって非常に便利なものである。日本でもこの種のリファレンス・サービスが国家的な規模で作られてもよいのではないかと思う。（なお、アジア経済研究所発行の *The Developing Economies* はほとんどの大学で購入している。インディアナ大学ではこのほかに和文機関誌、研究参考資料、調査研究双書が初巻より揃っている。）

以上、合衆国におけるイラン研究の現状を略述した。わたくしの合衆国滞在は1年にすぎず、訪れた大学も3校、またこの小稿の資料はほとんど大学のカタログや学科のプロシユアのみによった。したがって不十分のそしりを免れず、また思わぬ誤りもあるかもしれない。この点お断わりしておきたい。最後に、従来の American Oriental Society のほか、西アジア研究者のみによる学会が1966年に発足したことを記して、この稿を閉じたい。

（調査研究部 岡崎正孝）

イランにおける企業の農業の進展

岡崎正孝 著

119頁 ¥ 350

▷イラン農業とゴルガン地方農業の特徴一国民経済に占める農業の地位／土地利用／土地所有／機械化等▷ゴルガン地方農業の発展▷企業化の農場の成立と進展一農場の成立ならびに企業家の性格／生産手段の調達▷農場の経営内容▷企業化の農場成立の要因一先駆者の農場成立の条件／追従的農場輩出の条件▷ゴルガン地方農業の変貌

アメリカの援助政策

丸山静雄 編

192頁 ¥ 500

▷総論一援助政策の歴史と評価(丸山静雄)▷援助政策の推移▷援助の展開と実績／計画別実施状況／各種実施状況▷援助機構▷援助政策の評価▷援助効果▷援助政策の展望▷各論▷アメリカの台湾援助(藤術吉)／自由陣営の要塞経済援助／援助の効果▷アメリカの韓国援助(衛藤竜太)／対韓援助政策の動向／対韓援助の実績と効果▷インドシナ三国に対する経済援助(永川秀男)／南ベトナム援助／ラオス援助／カンボジア援助▷アメリカのタイ援助(野中耕一)／外国援助の動向／開発計画における援助資金／外国援助の効果▷アメリカのビルマ援助(今川瑛一)▷アメリカのインド援助(秋岡家栄)／アメリカ援助の概要／余剰農産物援助／軍事援助／援助効果